

GOD WITH US

Part 11: LATER LETTERS

Message 12 – 1 John

Walking in Love

1John 4:7-5:21

神はわれらと共に

パート 11：後の手紙

第 12 メッセージ – ヨハネの手紙第一

愛の内に歩む

ヨハネの手紙第一 4：7 - 5：21

はじめに

ヨハネの手紙第一は、イエスへの信仰の現実を示す 2 つの重要な証拠である、イエスの命令に対する従順と人々への愛に焦点を当てています。新約聖書のすべての手紙の中で、ヨハネは、この 2 番目のテーマ、つまり神への愛の証拠である、他者への愛に最大の注意を向けています。この短い手紙には、様々な形で「愛」という言葉が 34 回出現します。新約聖書の他の同じ程度の長さの手紙の中には、およそ 5~10 回、愛について言及されています。明らかに、愛は、ヨハネの神学の大きなテーマと言えます。その理由は、愛は神のご性質の中核であるからです。したがって、神の真の子どもたちがますます神に似た者と変えられるにつれて、神の愛がその性格の内に成長している証拠を示すでしょう。人々への愛がなければ、神を本当に知り、愛していると主張することは不可能です。

前回のレッスンから、第一ヨハネには、3 つの「サイクル」があり、著者は、3 つの「テーマ」をカバーしているということを見てきました。今回は、3 番目、つまり最後のサイクルを見ていきます。

3 番目のサイクル：4：7-5：21

3 番目のサイクルも、前の 2 つのサイクルと同じく、3 つのテーマ（真のイエスへの信仰、神の命令への従順、人々への愛）が見られますが、順序が異なります。お互いへの愛を強調する長い部分から始まります。「愛」という言葉は、この箇所だけでも 26 回用いられており、互いに愛し合うことによって神への愛を示すことの重要性についての新約聖書の決定的な箇所となっています。

A. お互いを愛する：4：7-21

-愛は神を知る証明です

4:7 愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。**4:8** 愛さない者は、神を知らない。神は愛である。（第一ヨハネ 4：7，8）

ヨハネの推論は単純です。神は（その本質的な性質において）愛であるため、神から生まれた人々もまた、他者への愛を表現することによって、その霊的 DNA を示します。私たちの天の

父とのこの類似性は、真に父との関係を持っている（神の御霊が内に宿っておられる）結果です。人を愛することを怠ることは、その人が真に神を知らない（つまり、神との関係の内にはない）ことを示します。

-神の愛は自己犠牲的。

4:9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。**4:10** わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。**4:11** 愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。**4:12** 神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。（第一ヨハネ 4：9－12）

ヨハネは、神の私たちへの愛の類を明らかにしています。神の愛は犠牲的、恵贈、無条件で、私たちがどのように他者を愛するべきかの模範を提供します。ヨハネは愛を感情として話しているではありません。むしろ、意志的な愛（意志による行為）です。あなたの愛に値するかどうかにかかわらず、あなた自身を犠牲にして、他の人を愛する決意です。

-イエスが神の子であることを認める。

ヨハネは、愛のテーマに関連して、真の神の子であられるイエスを信じる（イエスが実際に肉体をもって来られたことを否定する偽りの教師がいたことを思い出してください。）というテーマについて触れています。イエスが真に誰であるかを知り、信じる時、その御霊が私たちの内に宿ってくださいます。ここでは、「私たちの内に宿られる神」と「私たちが神の内にいる」と表現されています。

4:13 神が御霊をわたしたちに賜ったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。**4:14** わたしたちは、父が御子を世の救主としておつかわしになったのを見て、そのあかしをするのである。**4:15** もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである。（第一ヨハネ 4：13－15）

-神を愛し従うなら、審判の日を恐れる必要はない。

私たちが神の無条件の愛を理解するにつれて、神の愛の内には保証されていることを学ぶので、神との関係における恐れは徐々に減少します。裁きの恐れも、非難される恐れも、十分な善人でないことも恐れる必要はありません。神との関係にまだ恐れを抱いている人は、「彼の愛が全うされていない」（つまり、神の愛を完全に理解していない）。

4:16 わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。4:17 わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。4:18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。

(第一ヨハネ 4 : 16 - 18)

神の愛の深さを知り、体験することを学ぶことは、クリスチャン生活を送るための鍵です。信者が神の計り知れない、理解を超える愛に、しっかりと根付くようになることは、エペソ人への手紙第3章 17-19 節のパウロの祈りでした。多くの人は、他の人たち（親、兄弟、友人など）から経験した条件付きの業績指向の愛のために、神の愛を知り、経験するのに苦労しています。神の愛がそのような傷ついた心に留まるには、時間が要します。しかし、聖書に書かれているように、私たちが神の愛について瞑想し、日々、無条件の愛の内に生き、動くことを学ぶとき、神の愛は、獲得しなくてはならないもの、つまり、条件付きの愛であるという偽りを徐々に取り除き、神の驚くべき不変の愛の真実に置き換えることができます。このように、審判の日に対する恐れは、愛する天の父として知ることによる保証と自信に置き換えられます。

神を愛することと人々を愛することは切り離せない。

ヨハネは、中心的考えを何度も繰り返しました。この部分を、神への愛と人々への愛の両方を保つことの絶対的な必要性についての最も強い声明で締めくくっています。

4:19 わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。4:20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。4:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。(第一ヨハネ 4 : 19 - 21)

人を愛するのに苦戦している人はいますか？ あなたの内に住んでおられる神の御霊に、神があなたを愛されたのと同じ方法で、無条件に、自己犠牲的に、その人を愛するための神の力をあなたに与えてくださるよう祈り求めましょう。神が私たちを愛して下さったように、他の人を愛することがキリストへの従順の最も重要な側面です。

B. イエスが神であると同時に、人である

ことを信じる : 5 : 1-15

ここでヨハネは、イエスが真に誰であるかというテーマに戻ります。信仰が効果的であるためには、信仰の対象は信頼に値するものでなければなりません。これが、ヨハネが真の

信仰の基礎として、イエスが神であると同時に、人であったという真理を強調し続けた理由です。

-神から生まれた家族。

5:1 すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者である。すべて生んで下さったかたを愛する者は、そのかたから生れた者をも愛するのである。**5:2** 神を愛してその戒めを行えば、それによってわたしたちは、神の子たちを愛していることを知るのである。**5:3** 神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない。**5:4** なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。**5:5** 世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。（第一ヨハネ 5：1－5）

上記の箇所には、神の戒めを守るというテーマが全体に散らばっていますが、最初と最後の強調は同じで、イエスは神の子、キリストであると信じています。私たちの神への信仰は、私たちが「世を克服する」ことを可能にします。ヨハネが「世」の3つの側面、つまり肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢を指摘した第2章 15-17節を思い出してください。キリスト（の御霊）が内に住んでくださっているのです。神の子は、この世の誘惑に屈するのではなく、神に捧げる人生を送る力を持っています。ヨハネは最終的に、神の子たちが邪悪な者

とその世のシステムに対する勝利に同等の重点を置いて、この手紙を終えます（第一ヨハネ 5：18-21）。

-神の子、イエス・キリストの人性の事実。

ヨハネは、イエスの人性を否定する異端について繰り返し反論しました。ここでヨハネは、イエスが「水と血とをとっておってこられた」（5：6）と言っています。この句の意味は学者の中でも論争されていますが、ヨハネは、イエスの生涯の二つの出来事について言及していると思われます。イエスの公的伝道の初めに、ヨルダン川におけるイエスのバプテスマ（マタイ 3：13-17）と、イエスの血が注がれた、十字架での死（参照：ヨハネ 19：34,35、ヨハネは、イエスのわきから血と水が流れ出たのを実際に目撃しています。）についてです。御霊はこれらの出来事を通して、イエスが神であると同時に、人でもあったことを証ししています。

5:6 このイエス・キリストは、水と血とをとっておってこられたかたである。水によるだけではなく、水と血とによってこられたのである。そのあかしをするものは、御霊である。御霊は真理だからである。**5:7** あかしをするものが、三つある。**5:8** 御霊と水と血とである。そして、この三つのものは一致する。**5:9** わたしたちは人間のあかしを受け入れるが、しかし、神のあかしはさらにまさっている。神のあかしというのは、すなわち、御子について立てられたあかしである。**5:10** 神の子を信じる者は、自分のうちにこのあかしを持っている。神

を信じない者は、神を偽り者とする。神が御子についてあかしせられたそのあかしを、信じていないからである。

(第一ヨハネ 5 : 1 - 5)

イエスについての真理を絶えず証しすることは御霊の主な働きです (参照: ヨハネ 16 : 12-15、御霊は、人々をあらゆる真理に導き、イエスについての理解を助けるであろうとイエスは強調されました。)。ですから、御霊に祈るとき、次のようにいのちのことが好ましいでしょう。「真理の御霊よ、神の子イエス・キリストについての真理を理解し、その内に生きることができるよう助けてください。聖書を開くとき、真理を見せてください。説教を聞くとき、真理を見せてください。賛美の歌を聞くとき真理を見せてください。仲間の信者が励ましの言葉や、叱正の言葉を発するとき、私に真理を示してください。」御霊が神の言葉の真理に宿っている者を導くことを真理の御霊は常に喜びとされます。

-永遠の命を分け与えられたことを知る。

永遠のいのちは、神からの贈り物です。あなたがこの贈り物を受け入れる (罪のない神の子があなたの身代わりとなり、十字架上で、あなたの罪を負って死んでくださったので、あなたの罪は取り除かれたことを信じて、神の子を受け入れる) とき、あなたは**永遠の命** (そして完全な罪の赦し) を与えられます。その確信を得られます。

5:11 そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるということである。**5:12** 御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない。**5:13** これらのことをあなたがたに書きおくれたのは、神の子の御名を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせるためである。

(第一ヨハネ 5 : 11 - 13)

あなたは永遠の命を持っていることを確信しておられますか? 確信するシンプルな方法が一つあります。あなたは神の御子イエス・キリストを救い主として受け入れられていますか? 心の内に宿っていただくように招き入れられたのでしょうか? 永遠の命を受けたという確信が得られないのであれば、今日その問題を解決しませんか。今すぐ立ち止まって、イエス・キリストをあなたの救い主として、また主として招き入れましょう。第一ヨハネ第 5 章 11-13 節から上記の箇所をじっくりと読み、神のみ言による確信を受け取りましょう。あなたの内に息子が宿っておられるなら、永遠のいのちを手にしておられます! とてもシンプルです。

-祈りへの確信

5:14 わたしたちが神に対していただいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。

る。5:15 そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである。(第一ヨハネ5:14-15)

ここに、「私たちが神の御心に従って何かを願い求めるなら、神はそれを聞き入れてくださる。」と書かれていることに注意してください。これは、祈りがどのように機能するかを理解するための鍵です。私たちは神の御心に沿って願い求めなければなりません。でも、将来の「神の御心」を知らないのに、どうすればよいのでしょうか？ヨハネはここで、神の「将来の」御心について言っているわけではありません。むしろ、神の「道徳的」御心、または神の「明らかにされた」御心について言及しているのです。神がみ言を通して、すでに明らかにされた原則、価値観、議題について話しています。イエスが弟子たちに話された非常によく似た教えがあります：15:7 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。(ヨハネの福音書15:7)

「神の御心に従って」祈ることは、神のみ言に従って祈ることを意味します(イエスのみ言を私たちの内に深く宿らせ/従わせる)。私たちが神の御心をより深く知るようになると(神の「御旨」)、祈りは、私たちと世のための神の価値観と、お目的に、より一層一致するようになります。ですから、神が私たちの祈り

を聞いてくださり、同意してくださり、神のタイミングと方法で答えてくださることを確信して祈るようになります。

祈りについて、私たちの心が神の御心と息ぴったりに鼓動を打つとき、心が望むものは何でも求めることができると、誰かが説明したことがあります。ですから、効果的な祈りの鍵は、心を神の御心と真に一致させることです。父との親密さは、効果的な祈りに繋がります。なぜなら、私たちが祈るとき、神にとって本当に重要な事柄について、神と話し合うからです。最近の重大な祈りについて考えてみてください。神の御前に捧げた祈りを振り返り、調べるとき、神のみ言によって明らかにされているように、神の御心に従って祈っていると切り切ることができますか？もし、そうでない場合、どうすれば、神の御心と一致する祈りへと再調整することができるでしょうか？

C.神の戒めを守る：5：16-21

ヨハネは、真に神を知る証明としての従順のテーマに再び焦点を当てて手紙を締めくくります。

-罪を犯している人々のために祈る。

5:16 もしだれかが死に至ることのない罪を犯している兄弟を見たら、神に願い求めなさい。そうすれば神は、死に至ることのない罪を犯している人々には、いのちを賜わるである

う。死に至る罪がある。これについては、願い求めよ、とは言わない。5:17 不義はすべて、罪である。しかし、死に至ることのない罪もある。(第一ヨハネ5:16, 17)

上の箇所から、信者も罪を犯すことは明らかです(参照:1:8-10の同様の教えを思い出しましょう。)。ここでヨハネは、私たちが互いに祈り合うことができ、神は、罪を犯している人に「いのちを与える」と教えています。神は、罪を犯した人々を悔い改めと告白と神との交わりの回復に導かれます。より直接的な、神の訓育をもたらす罪に信者が関与している状況があります。ヨハネが「死に至る罪」と呼んでいる罪と思われる。これは、使徒5章1-11章で、アナニアとサツピラの捧げ物について、神に嘘をついた罪によって、肉体的な死をもたらした理由を説明します。同様に、パウロは、主の晩餐の誤用の結果、病気になり、死んでしまったコリントの信者たちの事例について言及しています(第一コリント11:30)。パウロは、コリントの別の状況について、もし罪を悔い改めていなかったなら、その罪人は死んでいたであろうと言及しています。(第2コリント2:6-8と1コリント5:1-5を比較)。このように、ヨハネが「死に至る罪」について話したとき、神の厳しい懲戒につながる可能性がある、故意で悔い改めない罪に従事している信者を指しているようです(ヘブル12:5-11)。しかし、ヨハネの要点は、ほとんどの場合、信者は「死に至るほどではない罪」に陥り、その場合、彼らのために祈ることができ、

神は、彼らにいのちを与えられる(つまり、彼らを回復される)ということなのです。

あなたが祈る必要のある、(あなた自身も含めて、他の人に対して)罪を犯している人はいますか? ヨハネはここで、罪を犯した兄弟姉妹のために祈るなら、神は、彼らに命を与える、つまり神は、彼らに罪を認め、告白させ、回復される(神と他の信者との真の交わりを回復し、生き返らせるように導いてくださる)と言っています。今日、あなたの祈りが必要な人を知っていますか? おそらく、告白できていない罪のために神との歩みに「行き詰まっている」のでしょう。これは頻繁に、他の信者に対する人間関係における罪であり、他の人に対する「憎しみ」です。神は、あなたの祈りを用いて、行き詰まりから助けてくださるかもしれません。鍵: 人間関係の罪の場合、再び、あなたがたの間で、いのちと和解と回復があります。第一ヨハネには、憎しみを扱う多くの句があります。イエス・キリストを信じる人々の間でのこの類の罪は、神にとっては重大です。参照: 2:9-17; 3:11-18; 4:20

-イエスが神の子たちに与える保証。

ヨハネによる書物(福音書、手紙、黙示録)では、神の王国とサタンの王国の間で激しさを増す、霊的対立が強調されています。ヨハネは、この進行中の闘争と、「神から生まれた」人々がいかに邪悪な者から特別な保護を受けているかを参照

して、この手紙を閉じます。サタンは、神の子であるあなたに嫌がらせをしたり、誘惑してくるかもしれませんが、神の霊があなたの内に住んでおられるので、邪悪な者はあなたに触れることができません。サタンは、この世のシステムを支配しているかもしれませんが（参照：コリントの人への手紙第二4：4とヨハネ12:31）、神の御霊が内に宿っている人のいのちと心を支配することはできません。

5:18 すべて神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは知っている。神から生れたかたが彼を守っていて下さるので、悪しき者が手を触れるようなことはない。 **5:19** また、わたしたちは神から出た者であり、全世界は悪しき者の配下にあることを、知っている。 **5:20** さらに、神の子がきて、真実なかたを知る知力をわたしたちに授けて下さったことも、知っている。そして、わたしたちは、真実なかたにおり、御子イエス・キリストにおるのである。このかたは真実な神であり、永遠のいのちである。 **5:21** 子たちよ。気をつけて、偶像を避けなさい。（第一ヨハネ5：18－21）

ヨハネは、なぜこの高尚な手紙を最後の勧告「子たちよ。気を付けて偶像を避けなさい。」で終わらせたのでしょうか？彼は、大都市エペソに住み、宣教していたことを思い出しましょう。この都市は、ギリシャの女神アルテミスの有名な神殿のため、観光の大きな中心地でした。この神殿は、古代の七不思議の一つとされていました。アルテミスの偶像崇

拝とそれに伴うすべての不道德な行動は、その魅力と社会的圧力のために簡単に繰り返し陥りました。偶像崇拜のライフスタイルを回避することは、今の時代の信念やライフスタイルの問題を回避するのと同じくらい困難でした。聖書学者F.F.ブルースは、偶像について、「キリストにおける（神の）自己啓示と異なる神の概念はすべて偶像である」と定義しました。したがって、グノーシス主義者がイエスを神聖な存在として誤って描写していますが、イエスの人性を認めない場合も、「偶像」と見なされる可能性があります。

ディスカッションの質問

1. 愛に重点を置いていることに注意しながら、第4章7-21節を読み通し、あなたが最も注目する箇所を1つ選ぶとしたらどこですか？
2. 第一ヨハネ第4章16-18節を読みなおし、あなたへの神の愛は、心にどれほど深く根付いているか考えてみましょう？あなたのために無条件で犠牲的な神の愛の内に生きることは困難ですか？もし、そうだとすれば、なぜですか？
3. この声明について話し合しましょう。神への愛と人々への愛は、信者にとって切っても切れない側面です。ヤコブ1章27節とマタイ22章36-40節とも比較してください。
4. 「憎しみ」についての聖書の見方から何を学びましたか。イエスは、あなたの人間関係において、あなたが個人的に何を行うように導いておられるのでしょうか？
5. あなたが注意を払い、身を守る必要のある「偶像」が頭に浮かびますか？